

『プロヴァンシアル』と『パンセ』における説得の運動

アンヌ・レジヤン＝シュジニ
(鈴木真太郎訳)

リュシアン・ゴールドマン¹⁾は、その有名な著作、『隠れたる神』において、『プロヴァンシアル』と『パンセ』のあいだには「思想的断絶」が存在するという考えを強く主張した。パスカルが経験した重大な危機が両者を隔て、その結果、生来の悲観主義が強まった、というのである。しかしながら、哲学者アンリ・グイエ（ゴールドマンの博士論文の指導教官）は、これとは逆に、『パンセ』は二つの企ての交差点に位置していると指摘している。すなわち、一方には（『プロヴァンシアル』の流れを組む）放縦なカトリックに対する論争があり、他方には自由思想家に対する論争があるのである²⁾。こうした二つの企ての出会いには物質的な次元においてもいわば客観化されている。というのも、「小さな手紙」を執筆するためにも、また 1657 年には、ピュロン主義者、イエズス会士の誤謬、さらには奇蹟についての考察を書き留めるためにも、同じ大判の紙を用いているからである。実際、ある種の「パンセ³⁾」はイエズス会に対する論争と直接的かつ明示的に結びついており、また多くのパンセは『プロヴァンシアル』、あるいは同じ闘争を続ける『パリの主任司祭の文書』と同時代のものである。しかし、単純に読んでみるだけでも、これら二つのテキスト群のあいだには相違点が存在することが明らかになる。

『プロヴァンシアル』と『パンセ』において用いられているレトリックを検討するよう促された本稿では⁴⁾、この比較によって生じうる二重の読解効果に距離を取りつつ、いくつかの緊張点について考察したい。第一に問題となるのは、著者性の過剰化である。すなわち、パスカルを『プロヴァンシアル⁵⁾』と『パンセ』の双方における唯一の著者であるかのように扱ってしまうということである。第二に問題となるのは目的論的な読解である。それは、

【訳注】要旨を損なわないかぎり意識している場合がある。

¹⁾ 【訳注】リュシアン・ゴールドマン（1913-1970）。ルーマニアで生まれ育った後、長きにわたってフランスで活躍した哲学者・社会学者。パスカルとラシーヌについて論じた *Le Dieu caché, étude sur la vision tragique dans les Pensées de Pascal et dans le théâtre de Racine* (1959), Paris, Gallimard（リュシアン・ゴールドマン『隠れたる神』、上・下巻、山形頼洋訳（ただし下巻は名田丈夫と共訳、社会思想社、1972 年（上巻）・1973 年（下巻））で広く知られる。

²⁾ Henri Gouhier, *Blaise Pascal. Conversion et apologétique*, Paris, Vrin, 2000.

³⁾ 【訳注】原文中小文字で記される *pensée* はパンセ（断片的）思索」と記す場合がある。ただし明確に“断章”を意味する場合は断章と訳す。

⁴⁾ 本稿は、鈴木真太郎氏の科研費プロジェクト（24K16029）の支援を受けて大阪大学で行われた発表に基づいている。

⁵⁾ 『プロヴァンシアル』について、次の先行研究を参照。Pierre Kuentz, « Un discours nommé Montalte » ; Yasushi Noro, « Les Provinciales et le rôle de Pascal dans la polémique janséniste » (<https://sites.google.com/view/grihl-ce-que-jaurais-dit/toutes-les-contributions/yasushi-noro>)

その本質的な不安定性にもかかわらず、あらゆる作品のなかでもとりわけ正典的な「作品」であるパスカルの『パンセ』⁶⁾へと意識を向け、『プロヴァンシアル』がいかに『パンセ』を「準備したか」を理解しようとする危険を伴う。この二つの落とし穴を完全に回避できると主張するつもりはないが、ここでは二重の迂回を試みたい。一方では、私の見方はパスカルに据えられ続けるが、単独の作者としてではなく、これらの著作がもつ複雑な校訂史がいかなるものであれ、『プロヴァンシアル』、そしてなおさら『パンセ』の主要な「構成者 configurateur⁷⁾」としてである、ということ。他方では、ある思想の漸進的な生成を再構成するのではなく、むしろ、私たちに届く多様な論証的配置——これらの論証的配置は、ある特定の時点において、ある特定の仕方、ある特定の読者類型に働きかけることを目指している——を通して現れる思考の運動を捉えることによって、目的論的読解の危険から距離を取るということ、である。

いくつかの主題の再構成

紙幅の関係上、網羅性を期すことは言うまでもなくできない。ゆえにここでは、『プロヴァンシアル』と『パンセ』の双方に見られ、相互に結びついており、しかもこれらのテキストの第一の読者層——すなわち社交界の人々および法服貴族——にとって特に理解可能と思われる三つの主題に焦点を当てることにする。

真理の可視性

第一の主題、すなわちこの世界における真理の可視性の問題は、奇蹟の出現によってのみ提起されるわけではない。それは、ポール・ロワイヤル擁護に結びつく他の動機によっても提起されている。そのことは、「第三の小さな手紙」の一節（「この命題は〔中略〕別の口から語られていればカトリック的だっただろう。しかし、アルノーさんの口から出たからこそ、ソルボンヌはこれを断罪したのだ⁸⁾」）に近い断章 954-791 が示している。『パンセ』に見られる表現はより一般的である。「ある命題は、ある著者にとっては善であり、別の著者にとっては悪である⁹⁾」。この表現は逆説的でもある。次の説明が続く。「なるほど、しかしだか

⁶⁾ 【訳注】原文で斜体表記されている。以下、訳語が斜体表記の場合は同じ理由による。

⁷⁾ 私はここでこの新語をあえて用いる。それは、『プロヴァンシアル』の生成全体——すなわち、今日では「編集的生成」、さらには「ポスト編集的生成」と呼ばれるものまでを含む広義の生成——を特徴づける複雑な共著者性の諸操作を平板化することなく、協力者たちによって集められた素材の戦略的な構成において、パスカルが疑いなく中心的な役割を果たしていた点を指し示すためである。この点については、Anne Réach-Ngô, « Peut-on parler de « genèse éditoriale » au XVI^e siècle ? Présentation », *Seizième Siècle*, N°10, 2014, p. 7-14 ; ainsi que R. Mahrer « La genèse post-éditoriale : un champ de recherches ouvert par la philologie numérique », *Revue d'histoire littéraire de la France*, Vol. 116(3), 2016, p. 573-594 を参照。

⁸⁾ Blaise Pascal, *Les Provinciales*, éd. Louis Cognet et Gérard Ferreyrolles, Paris, Classiques Garnier, 2010 [以後 *Pr* と表記], p. 164.

⁹⁾ L954-S791. 『パンセ』への参照は 2024 年 10 月 15 日に参照したウェブサイト <https://www.penseesdepascal.fr/> に基づく。左の数字はルイ・ラフュマ版、右の数字はフィリッ

らこ他にも悪い命題がある」。それは、真理そのもの、あるいは少なくともその表現の不安定性という主題に接続し、真なるものの基準が捉えがたいものであることを独自の仕方で示唆している（同じ紙片の後半には「私は、ある意見に対して別の意見があるのだと思っていた」とある¹⁰⁾。

奇蹟の主題¹¹⁾もまた、まず聖荊の出来事を契機として、この墮落後の状態における真理の可視性という問題を提起する。実際、ロアネーズ嬢に宛てた一通の書簡において、それまで秘されてきた聖荊の奇蹟が公式に承認されたことは、同様に長らく知られずにいたポール・ロワイヤルの信仰の真理と重ね合わされ、イザヤ書 45 章 15 節——「まことに、あなたは隠された神です」について幅広い思索を生み出している。神は「ごく少数の人々」に対してのみ「驚嘆すべき出来事 *des coups extraordinaires*」によって姿を現す。しかし多くの場合、「秘義 *un étrange secret*」のうちに身を退き、「人間の目では見抜けない」存在であり続ける。それは、キリストの神性や、聖体におけるパンと葡萄酒の中での現存が、多くの人々には識別不可能であるのと同様である。よく知られているように、『パンセ』は、この本来は論争的な議論を引き継ぎつつ、それを護教論的な議論へと拡張する。すなわち、墮落後の状態においては、真理は常に虚偽の中に混じり合ったかたちでしか人間に現れえないのである。本来もっとも明白で神聖な徴であるはずの奇蹟ですら、盲目となった人々¹²⁾の目に真理を守りきれないのであれば、なおさら人間的秩序に属する真理は、真理であるか否かを確実に見分けることができないままであり、両義的なものとして留まらざるを得ない。このことから、ポール・エルンスト¹³⁾の文献生成論的研究によれば、『パンセ』の第一の執筆層に属する（明らかに少なくとも二段階で書かれているとはいえ）ほぼ完全に自筆による、大判の表裏一体の「多方向的」な一枚の紙片において、ピュロン主義の主題が現れるのである。この出現は、一見すると逆説的に思われるかもしれない。というのも、同時期に『プロヴァンシアル』は、放埒的決議論者に体现された道徳的相対主義とまさに闘っているからである。実際、先に言及した紙片には、イエズス会士とその道徳的放縦を明確に標的とするパンセが複数含まれている。しかし、「ピュロン主義」という、一見すると「小さな手紙」の道徳的枠組みからはかけ離れているように見える標題の下には、『プロヴァンシアル』においてきわめて顕著であった一つのモチーフ、すなわち殺人の問題が再び現れるのである。

プ・セリエ版の番号に対応する。

¹⁰⁾ <https://www.penseesdepascal.fr/Hors/Hors41-moderne.php> を参照。

¹¹⁾ この問題について、塩川徹也の見事な研究 (T. Shiokawa, *Pascal et les miracles*, Paris, Nizet, 1978) を参照。なお同書は、『パスカル：奇蹟と表徴』という題で邦訳されている（岩波書店、1985 年 12 月）。

¹²⁾ パスカルにおける、奇蹟が「見えない」ということについて、次の論文を参照：Hirofumi Kawakami, « Voir autre chose que ce que je vois. La vision chez Pascal », thèse de doctorat dactylographiée, dir. Laurent Thirouin, Université Lumière - Lyon 2, 2024, p. 111-113.

¹³⁾ Pol Ernst, *Les Pensées de pascal : géologie et stratigraphie*, Oxford, Voltaire Foundation, 1996.

ピュロン主義

この世はどんなものもある部分では真でも、他の部分では偽である。本質的真理はそのようなものではない。それは完全に純粋で、完全に真である。この混交は真理を汚し、破壊する。何ものも純粋に真ではない。こうして純粋に真という意味では、真なるものは何もない。殺人が悪いのは真だ、と言われるか。その通り、なぜなら私たちは悪と偽をよく知っているのだから。しかし何が善かについてはどうか。純潔か。そうではない。そんなことをしたら、この世が終わってしまうだろう。結婚か。いや、貞潔のほうがよい。殺さないことか。いや、恐るべき騒乱が起こり、悪人が善人を皆殺しにしてしまうだろう。殺すことか。いや、それは自然の破壊をもたらすだろう。私たちは真も善も部分的にしか、しかも悪と偽が混ざったものとしてしかもっていない¹⁴⁾。

一方で、殺人という行為は、各人に刻み込まれた自然法が悪をそのようなものとして認識せうる卓越的な例である。この知は純粋に否定的なものではあるが、実践的であり、さらには『プロヴァンシアル』において決定的な役割すら果たしている。実際、『プロヴァンシアル』の著者はこの点に依拠して、最低限の禁止事項にもかかわらずその認識を失った決疑論者を嘲弄したのである。ここでもまた、「*a fortiori* 強化」の議論が用いられている。すなわち、もしイエズス会士が、この最小限の道徳的知識すら意識していないのであれば、なおさら、他のいかなる道徳的知識についても意識していないはずである、というのである。

あまりにも多くの機会にあなたがお与えになる殺人の許可は、この問題に関してあなたが神の律法をあまりにも忘れ、自然の光を消してしまったかのように見えます。あなたは宗教と常識の最も基本的な単純な原則に立ち返る必要があります。なぜなら、個人は他人の生命に対して権利を持たないという感覚ほど自然なことがあるでしょうか¹⁵⁾？

ところが、先に引用したパンセ——おそらく『プロヴァンシアル』と同時代のものである——において、パスカルは逆の議論にも場所を与えている。すなわち、ある個人が社会秩序をあまりにも深刻に脅かす場合には、殺すことが許されなければならない、というのである。実際のところ、この矛盾は見かけ上のものでしかない。というのも、この第二の場合において正当性をもって死刑を執行するのは、個々人ではなく、司法制度によって代表される共同体だからである。この「殺してはならない」という禁止に対する例外は、実のところ、先ほど引用した第 14 信においてすでに示されていた。そこでは次のように付け加えられている。

¹⁴⁾ L729-S611.

¹⁵⁾ *Pr.*, 14^e lettre, p. 369-370.

しかし、人間社会を存続させ、それを乱す悪人を罰することがその摂理の御心であったため、神は自ら、犯罪者から命を奪うための法を定められた。したがって、その命令なしには処罰されるべき暴力行為であったであろうこれらの殺害は、その命令によって称賛に値する刑罰となるのであり、その命令を離れては、不正以外の何もものも存在しない¹⁶⁾。

このようにして、パスカルの思考は当初からすでに弁証法的であることが明らかになる。すなわち、『プロヴァンシアル』においても『パンセ』においても、常に「鎖の両端 *les deux bouts de la chaîne*」——ここでは、殺害の禁止とその正当化——を同時に保持しているのである。

司法制度

しかしながら、司法制度の扱いに関して、『プロヴァンシアル』と『パンセ』のあいだの一致は決して全面的なものではない。というのも、司法制度は、いくつかのきわめて有名なパンセにおいて、まったく異なる仕方と言及されているからである。先に引用した第 14 信の一節が示すように、「小さな手紙」は、一般的な無秩序に対する、そしてとりわけイエズス会士およびその聖職者としての同盟者たちの悪習に対する歯止めとして、民間の裁判所を提示している。実際、ジャン・ダルバのような者、聖職売買に関与する者、決闘者などの悪習に対抗できるのは、まさにこれらの裁判所なのだ。同様に、第 8 信は、裁判官たちの廉直さと洞察力を強調している。「彼ら [裁判官たち] が、あなた方の蓋然説に反対するというのは、私には実に奇妙に思われる。[中略]それは彼らに大変都合のよいものだからだ¹⁷⁾」。さらに重要なのは、第 14 信が、「キリスト者の裁判官」について次のように述べている点である。彼らは、「福音の法に照らして市民法を釣り合わせた。外面的な正義の実践が、キリスト者が内面に抱くべき感情と矛盾しないようにするためである¹⁸⁾」。ここで用いられている釣り合い *proportion* という語を深刻に受け止める必要がある。それは、数学者であったパスカルにとって、きわめて厳密な意味を持っていたはずだからである。人間の法の価値は決して絶対的なものではないとはいえ、それらは単なる「歯止め」(確かに不完全ではあるが、人間の墮落した状態に適合した歯止め)にとどまらず、神聖な正義の一つの具象でもあり、その釣り合い関係を忠実に保持しているのである¹⁹⁾。

これに対して、『パンセ』は、裁判官たちをしばしば滑稽で取るに足らない存在として描き出す。とりわけ——そしてこれは言うまでもなく重要であるが——「想像力」と題された

¹⁶⁾ *Ibid.*, p. 370-371.

¹⁷⁾ *Pr.*, 8^e lettre, p. 249.

¹⁸⁾ *Pr.*, 14^e lettre, p. 382.

¹⁹⁾ Jean Mesnard, « Valeurs absolues et valeurs relatives chez Pascal », dans *Pascal, Port-Royal, Orient, Occident. Actes du colloque de l'Université de Tokyo, 27-29 septembre 1988*, Paris, Klincksieck, 1991, p. 364 を参照。

有名な断章 L44-45-S78 においてそうである。そこでは、裁判官や医師の威容が容赦なく描写され、モンテーニュに由来する偽りの偉大さへの批判が引き継がれている。また、説教の最中に笑いをこらえきれなくなる裁判官の一場面もよく知られている。

齢を重ねて人々の尊敬を一身に集めるあの裁判官なら、純粹で崇高な理性に従って振る舞い、民衆の想像力だけを迷わせるむなしい周囲の状況には目もくれず、ものごとをその本性に即して判断するとおっしゃるか。彼が、説教が行われる場に、堅固な理性を熱心な慈愛で裏打ちし、敬虔な信心を携えて入っていくのを見てみよう。彼は、模範的な尊敬の念をもって、説教を聴く態勢にある。そこに説教師が姿を現れるとする。彼が生まれつき、しゃがれ声で奇妙な顔立ちをしており、床屋が髭を剃りそこない、おまけにたまたま顔に何かついていたらとしよう。彼がどれほど偉大な真理を述べ伝えようとも、われらのお偉方の重々しい態度が失われるのは確実だ。(L44-45-S78)

この裁判官は、たとえ「堅固な理性さ」と「熱心な慈愛」をもって臨んでいたとしても、それ自体では取るに足らない欠陥によって特徴づけられた外見を前にして、精神、さらには魂そのものを放棄してしまうのであれば、どうして厳密に訴訟を裁くことができるだろうか。そして、知性と道徳の両面において模範的であるかに見える、これほど経験豊かで尊敬される裁判官ですら、想像力のもつ破壊的な力に対してこれほど脆弱であるならば、(知的、道徳的、靈的な意味で) より未熟な、若く堅固さに欠ける同僚たちは、いったいどうなるだろうか。

想像力でないとすれば、今度は利害が、人間の正義を損なうことになる——今度は弁護士の側においてである。

そして、前もってたっぷりと報酬を支払われた弁護士は、自分が弁護する訴訟事件をどれほど理のあるものだと見なすことだろう。彼の大胆な身振りが、こうした外見に欺かれる裁判官たちの目には、それをどれほど正当なものとして映し出すことだろう。なんと滑稽な理性だろう、風の一そよぎを受けて、あらゆる方向へ向かう理性とは！(L44-45-S78)

ここで注意すべきは、(主要な間テキストを提供している) モンテーニュにおける場合と同様に、弁護士がここで厳密な意味で偽善者として描かれているわけではない、という点である。つまり、利害が彼の理性を盲目にするほどに作用し、その結果、彼は自分自身を欺き、ひいては裁判官たちをも欺くのである。こうして、司法制度の主要な担い手たちは、自らの理性を奪われてしまうことになる。

ここにもまた、矛盾があるのだろうか。教会裁判所による迫害を受けていたポール・ロワ

イヤルが、自らの弁護を政治権力に委ね、聖職者会議の決定に対抗して高等法院の擁護を期待していた時期にあって、民間の裁判官に信頼性と廉直さを帰することは、支援要請を裏づけ、潜在的な同盟を評価するための信頼表明に等しい。それは、『プロヴァンシアル』が世俗的正義を何らかの仕方で「絶対化」していることを意味するものではない。

そもそも『プロヴァンシアル』の段階ですでに、裁判官の弱さの可能性は示唆されていた。第8信は「腐敗した裁判官²⁰⁾」の存在に言及しており、第13信は、ある状況において「裁判官たちの警戒心」がイエズス会士によって「欺かれた」可能性を認めている²¹⁾。第14信は、死刑判決を下す可能性のある裁判所において取られる数々の予防措置を詳述している。裁判官は少なくとも7人でなければならない、その中には「犯罪者から被害を受けた者が一人も含まれてはならない。情念が判断を歪め、あるいは損なうのを防ぐためである²²⁾」。それほどまでに、たとえ「廉直さ」と「能力」を理由に選ばれた裁判官であっても、情念は常に待ち構えており、身体はいついかなるときも精神を専制的に支配しうるのである。したがって、『パンセ』に見られるピュロン主義的要素は、この、両作品の対照をもっとも鮮明に示しているかに見える裁判官という人物像に関してさえ、すでに『プロヴァンシアル』のうちに萌芽として存在しているのである。

さらに、『パンセ』において弁護士の弱さが告発されていることは、裁判官の腐敗を告発することを意味してはいない。もし腐敗があるとすれば、それは人間理性そのものの腐敗であり、それは支払われた金額によるものではなく、墮落 *Chute* によるものだからである。まさに墮落こそが、私たちの諸能力の階層秩序を転倒させたのである。ここでの欠陥は倫理的なものではなく、認識論的なものである。それは意志の弱さに由来するのではなく、理性の弱さに由来する。したがって、ここで裁かれているのは司法制度ではなく、人間そのものである。この点において、パスカルの視点はラ・ブリュイエールのそれと無関係ではない。ただし、両者の人間観はいずれも広くアウグスティヌス的であるとはいえ、完全に重なり合うわけではない。ラ・ブリュイエールにおける裁判官サンニオンは（正しく裁くための時間を取る代わりに、貴族的身分を示す外的徴候を生み出すことに終始するが）、その弱さは、外部へ²³⁾、すなわち外見や社会的記号の産出へと絶えず自己を投影する遠心的運動として現れる。これに対して、『パンセ』の裁判官は、自己の判断との内的関係を歪めてしまう求心的運動として弱さを示す。すなわち、外的要因（受け取った金額）の影響のもとで、実際には利害によって動機づけられた決定を、あたかも理性による正当な判断であるかのように、理性そのものに正当化させるのである。

名誉

名誉というモチーフは、『プロヴァンシアル』および『パンセ』において試みられている

²⁰⁾ *Pr.*, 8^e lettre, p. 248.

²¹⁾ *Pr.*, 13^e lettre, p. 364.

²²⁾ *Pr.*, 14^e lettre, p. 383.

²³⁾ Jean de La Bruyère, *Les Caractères*, « De la Ville », 10, p. 296-298 を参照。

状況や論証装置に応じて、いくつかの主題がどのように再配置されているかを示す、最後の例を提供してくれる。21 世紀の語彙において、この概念は、自己への誠実さや言葉への忠実さといった一種の誠実性に支えられた個人的徳を指す。しかし 17 世紀において名誉とは、まず何よりも、自らの身分や家系を汚さないように配慮することを意味していた——それは決闘によって人を殺すことを含みうる。したがって名誉とは、個人的な道徳的要請の名というよりも、家族という集団の名において引き受けられる集合的表象の名であり、その名のもとに（それが徳であるかどうかは別として）人はある種の行為、場合によっては殺害行為さえも、遂行し、あるいは遂行する義務があると感じるのである。このように名誉は、しばしば一定の「正当な暴力」という観念と結びついており、それゆえ一見きわめて肯定的に見えるこの概念が、パスカルのテキストにおいてはきわめて問題含みの価値として姿を現すのである。

名誉はすでに『プロヴァンシアル』、とりわけ第 7 信において非常に顕著であり、『パンセ』全体を通じて繰り返し現れる。貴族的倫理の中心に位置する概念であることを考えれば、それが当時の決議論者の手引書における結節点の主題であったことは、何ら不思議ではない。『プロヴァンシアル』において、名誉は本質的に「誇り *point d'honneur*」と同一視されている。いくつかのパンセは、「小さな手紙」と直接結びつきつつ、決闘の決議論という観点から、この連関を引き継いでいる（L722-S602 参照）。しかし他方で、名誉により広い射程を与えるパンセも存在する。たとえば、ポール・エルンストが第一の執筆層に属すると同定するパンセ群において、名誉は人間が気晴らしへと向かう傾向を示す、きわめて代表的な例として提示されている。ここでの名誉は、実際には幻想への教育でしかない教育制度と結びつき、人々が想像上の価値を互いに伝達する仕組みの一部となっている。それはもはや暴力や殺害と結びつくものではなく、むしろその実質、さらにはその重みを失い、社会的虚構、ほとんど子ども向けのおとぎ話のようなものへと還元されている。実際、このパンセが幼少期への言及から始まり、娯楽への言及で終わっているのは偶然ではない。

気晴らし

人は幼少期から、自分の名誉や財産や友人を大切にするように、さらには友人たちの財産と名誉も大切にするようにしつけられる。身を砕くまで、商売、外国語の勉強あるいは武芸の修行をやらされる。そして、自分ばかりでなく、友人の健康、名誉、財産が良好な状態になれば幸福になれるのだと教え込まれ、どれか一つでも欠ければ不幸になるのだと思い込まれる。こうして、人は朝早くから心を悩ませる責務や仕事を与えられる。「これが人を幸福にするための奇妙な方法だ。これ以上うまく人を不幸にする方法があるだろうか」、とあなたは言うだろう。「どうすればよいのか」、だと？必要なのは、これらすべての心配事を取り除くことだけである。そうすれば、人は自分自身を見つめ、自分が何者であるのか、どこから来て、

どこへ行くのかを考えるようになるだろう。だからこそ、人をできる限り忙しくし、気を逸らさなければならないのである。そして、これほど多くの用事を準備しておきながら、もし少しでも暇な時間ができると、人はそれを気晴らしや娯楽に費やし、常に完全に何かに没頭するよう勧められるのである。(L139-S171)

名誉の追求が悪であるとすれば、それはもはや、名誉が殺人という大罪へと導きうるからではない。そうではなく、名誉が、人間に自らの悲惨さを見つめさせず、真に神へと向かうことを妨げるからである。それは、専ら自己へと向けられた悪である。本来は差異化を目指していた名誉は、あらゆる区別的な性格を失ってしまう。つまり、名誉は誰一人として区別することがなくなり、数多くある人間の気晴らしの一つにすぎないものとなる。それは貴族に特有の傾向ではなく、むしろ社会的身分のいかなを問わず、あらゆる人間の内奥に現れる傾向に対応している。したがってこの主題は、貴族出身であるか否かを問わず、すべての人間に訴えかけうるのである。

しかしながら、名誉に関するもっとも顕著なパンセ (L89-S123、L90-S124、L92-S126) は、「気晴らし」の束 *liasse*²⁴⁾ではなく、「現象の理由」の束に分類されている（そしてポール・エルンストによれば、より後期の執筆層に属する）。ここで名誉は、民衆の意見から、生半可な知者、知者、敬虔な信者²⁵⁾を経て、完全なキリスト者の意見へと至る解釈学的運動の中に組み込まれている。もはや問題となっているのは、自分自身や友人の名誉を守ることではなく、第三者に対して払われる名誉の実践である。すなわち、自己の名誉ではなく、他者の名誉である。したがって、名誉の問題に関与するために貴族である必要はなくなる。この転位によって、名誉という主題は、『プロヴァンシアル』論争が主として想定していた読者層よりも、社会学的にはるかに広い読者層に訴えかけることが可能となる。

現象の理由

これには驚いた。人は錦織の衣を身にまとい、七、八人の従者を従えた人物を私が敬うことを望まない。だが、もし私が挨拶をしなければ、彼は私に鞭打ちの刑を加えさせるだろう。こうした衣装は力だ。それは、よく装備された馬が他の馬に対して持つ力と同じである。もっともモンテーニュは、この差異がどこから来るのかを見ようともせず、そこに差異があることに驚き、その理由を問う点で滑稽である。

²⁴⁾ 【訳注】パスカルの遺稿の一部は束 (*liasse*) に綴じられた状態で発見された。この束はいわゆる「ファイル」に相当し、将来的に「章」になる可能性があった。Cf. « Les liasses ainsi classées pourraient recevoir le nom de chapitres », Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, 2^e éd., Paris, SEDES-CDU, 1993, p. 27.

²⁵⁾ Hirotugu Yamajo, « La critique de l'apparence chez Pascal », p. 70-71. DOI : https://www.jstage.jst.go.jp/article/littera/6/0/6_61/pdf/-char/ja. Consulté le 9 juin 2024 を参照。なお同論文の邦訳は『Correspondances (コレスポンダンス) 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』、朝日出版社、2020年に収録されている。

「実際、一体どこから、云々」。(L89-S123)

第 14 信において「幻影²⁶⁾」であった名誉は、ここに至って「再び実体化」される。もはやそれは、「誇り」から生じる決闘のように、結果が深刻、さらには致命的になりうるからではない。そうではなく、より複雑な社会的・政治的因果の連鎖の中に組み込まれることによって、少なくとも部分的には正当化されるのである。なぜなら、「衣装」が「力」であるだけでなく、とりわけ「完全なキリスト者たち」が、「より高次の別の光」によって「高貴な生まれの人々」に敬意を払うからである。すなわち、人間的秩序は、その不完全さや恣意性にもかかわらず、墮落した人間の状態にふさわしいものとして、また一種の公共善を可能にするものとして、神によって望まれているのである。この点は、『大貴族の身分に関する講話²⁷⁾』において展開されることになる。イエズス会士に対する論争における道徳的論証は、ここで護教論的なものへと転じる。名誉は、集合的要請としてさえも再評価されるのである（人名や家系の威信という幻想的価値から、公共善という現実的価値へと移行する）。さらに名誉は、個人的な道徳的要請としても現れる²⁸⁾——そのため、『プロヴァンシアル』に結びつくにもかかわらず、パンセ断章 L714-S592 においてもこの語が肯定的に用いられているのである：「約束を守らず、信義もなく、名誉も知らず、真理もなく、心が二重な人々……²⁹⁾」。

結論

以上で見てきたように、これらのモチーフを、（時に矛盾によって足元をすくわれるかに見える）世界観の構成要素や主題としてではなく、多様な論証戦略の中に取り込まれた思考の対象として捉えるならば、パスカルの世界観（Weltanschauung pascalienne）の全体的整合性という問題は、やや異なる仕方で立ち現れてくる。

一方では、それは『プロヴァンシアル』を確実に特徴づけている共著者性のためであり、この点は、今日私たちに伝えられている形の『パンセ』にも欠けてはいない（もっとも、『プロヴァンシアル』がより集団的思考に属するのに対し、『パンセ』は主として個人的思考に属すると考えうるが）。方法論的観点から言えば、この共著者性は、ある主題が両方のテク

²⁶⁾ *Pr.*, 14^e lettre, p. 386.

²⁷⁾ 【訳注】1660 年末頃。なお本小品の邦訳はパスカル『小品と手紙』塩川徹也・望月ゆか訳、岩波書店、2023 年に収録されている。

²⁸⁾ 「他者からの評価（尊敬）を承認されたいという、疎外不能な欲求によって示されるこの現象学的な偉大さ」について、Pierre Lyraud, « Les fantômes de l'honneur. Pascal, lecteur du *Cid* », *Courrier Blaise Pascal*, 44 | 2022, p. 50 を参照。

²⁹⁾ 【訳注】パスカル『パンセ』塩川徹也訳、中巻、2020 年（2015 年）、625 頁の脚注（1）には、『プロヴァンシアル』第十三信（一六五六年九月三十日）の結びの部分に類似した表現が見られる。なおこの一節の筆跡はパスカルのものではなく、上下に一本の削除線が引かれている、とある。

スト群においてどのように構成されているかを問うことを妨げるものではない。すなわち、後に『パンセ』と呼ばれることになる諸テキストを執筆しているパスカルは、『プロヴァンシアル』という集団的企てを単に想起しているだけでなく、しばしばなおそこに関与しており、したがって少なくとも部分的には、そこから着想を得ているのである。

他方で、ある主題の扱いを、それが組み込まれている、あるいは組み込まれることを意図されているように見える論証装置から切り離さずに考察するならば（後者の場合には当然ながら、より慎重さが求められるが）、これらの著作に対してしばしば採られてきた、より伝統的な著者中心のアプローチをも柔軟化することが可能となる。そうすることで、『プロヴァンシアル』と『パンセ』の間に、あるいはそれぞれの内部に働いている緊張関係を、相殺することなく、視野に収めることができるのである。

確かに、パスカルが想定している読者を特定することの困難さ、あるいはその読者層の異質性（『プロヴァンシアル』はイエズス会士に向けられているが、何よりも私たちが「教養ある一般大衆」と呼ぶであろう人々に向けられている。一方で『パンセ』のある部分は不信仰者に向けられているが、同時に熱心とは言えないキリスト者にも向けられている、等々）、さらには、『パンセ』という「遺稿群 *papiers d'un mort*」がいかなる明確な宛先を持っていたのかについての根本的な不確実性がある——これらすべては、これらの著作を純粹に修辭学的に解釈することを容易にはしない。加えて、『プロヴァンシアル』と『パンセ』は同じ仕方で「宛てられて」いるわけではない。前者が即時的に伝達し、作用することを目指しているのに対し、『パンセ』という名のもとに集められた諸テキストはいったい誰に宛てられているのだろうか。この問いに単一の答えはおそらく存在しない。『パンセ』は、『プロヴァンシアル』が構築するものよりはるかに多様な読者との関係を試みる、一種の実験室として捉えることができるからである。多くのパンセは、きわめて強く読者に宛てられたテキスト装置を準備していると考えられるが、他方で、パンセそれ自体としては、誰にも宛てられていないものもあるだろう——その場合、それらは修辭学という概念そのものを問い直すか、あるいはその射程を拡張することを私たちに促すのである。

しかし全体として見れば、この論証的次元が、『パンセ』においても『プロヴァンシアル』においても中心的であることは否定しがたい。ところが、とりわけ『パンセ』においてパスカルの思想そのものを見出そうとする際、この次元はしばしば過小評価されてしまう。この欲求は理解可能であり、さらには不可欠でさえあるが、同時にそれは、パスカルの思想がこれらの著作において、修辭性を欠いた形で、それ自体として提示されているかのように扱ってしまう危険を孕んでいる。実際には、私たちはパスカルの思想に、主として説得的装置、あるいは説得的装置の準備として特徴づけられるテキストを媒介として接しているのであり、それらは周知のように、強い多声性を備えているのである。ポール・エルンストの「位層学的 *stratigraphique*」アプローチには、不可避免的に脆弱な部分や盲点が存在するとはいえ、それは、パスカルの生涯のある時期に、複数の論証的企てがどのように絡み合っていたかを考えるよう私たちを促す。そのとき思考は、主権的な自律性のうちに展開されるのではなく、

部分的に同時進行しつつも互いに区別される修辭的関与の枠内で展開されるのであり、それゆえにこそ、パスカルの思考に本質的に備わる対話的性格が十全に展開されうるのである。裁判官が同時に尊敬に値し、かつ滑稽でもあるのは、一方では、より高次の正義を象徴する制度の中核にいる裁判官として、民間の裁判官に語りかける必要があり、他方では、あらゆる地上的な偉大さや確実性から人間を引き離そうとする人間一般に語りかける必要があるからである。同様に、名誉の社会的重要性が、同時に幻想的（あるいは有害）であり、かつ正当化されるのも、貴族にとっての名誉の重要性を相対化すると同時に、墮落後の世界において神が望んだ秩序の中に、すべての人々のために名誉を再び位置づける必要があるからである。要するに、パスカルが「鎖の両端を同時に握っている」とすれば、それは、この根源的な対話性が、きわめて多様な対話相手との論争的対話の中で、それ自体として異なる視座や論証目的のもと、思考が形成され、精緻化されていく過程から養われているからにほかならない。死はパスカルのパンセをほとんど聖遺物のように固定してしまったが、パスカルのパンセそのものは、常に運動のうちにある。それは、他者に絶えず語りかけ、その者自身をも運動へと導く、その運動の中にあるのである³⁰⁾。

新ソルボンヌ大学

『ルネサンスから啓蒙主義へ』研究チーム（EA174）

³⁰⁾ ロラン・ティルアンが小品『罪人の回心について』を手がかりに示しているように、パスカルにおける回心は、連続的かつ漸進的な過程である。この意味において、『プロヴァンシアル』の読者を動かすことは、あるパンセ（断章）が向けられている生半可なキリスト者や不信仰者を動かすことと、本質的に異なる性質のものではない。Laurent Thirouin, « Pascal ou les continuel commencements de la conversion », *Communio*, n° 290(6), 2023, p. 17-31. <https://doi.org/10.3917/commun.290.0017> を参照。（2024 年 6 月 10 日閲覧）